

調理済み・半調理済み食品の利用実態調査 —イメージについて—

新潟大教育○高橋洋子 勝田啓子 大阪成蹊短大 山本友江

広島中央短大 大下市子 山口大教育 五島淑子 山口女大家政 足立蓉子

目的 家庭をとりまく食環境の変化が大きく進む中、その変化を知る一つの指標ともいえる調理済み・半調理済み食品の利用状況についてアンケート調査を行い、昨年の本学会で利用状況について報告した。本報はそれぞれの食品グループに対するイメージについて報告する。

方法 調査時期;1990年6月～7月 対象者;新潟県・大阪府・広島県・山口県在住の30～50才代主婦 調査項目; 調理済み・半調理済み食品(そう菜、冷凍食品、レトルト食品、インスタント食品、持ち帰り食品)の各食品グループに対するイメージを自由連想法で3つまで記入してもらった。有効回答数744、回収率63.6%であった。食品以外の回答のうち、好感や支持など好ましいものを(+)、不安や拒否とするものを(-)、どちらともいえないものを(±)に区分し、分類した。

結果 ①そう菜:無回答22.0%、食品名54.2%。多様な食品名の回答がみられた。市販品を購入することに対する抵抗感、味・価格・品質に対する不満、不安から、(-)イメージが多かった。②冷凍食品:無回答23.8%、食品名55.1%。保存性の面で(+)イメージの回答が多かった。③レトルト食品:無回答40.0%、誤答も多くあり、食品自体の理解が低いことがわかった。食品名42.2%。④インスタント食品:無回答30.6%、食品名49.8%。ラーメンの回答が多く、簡単・便利という(+)イメージが多いが、一方健康への不安や味への不満の(-)イメージもあった。⑤持ち帰り食品:無回答38.4%食品名44.9%。食品名としてすし、ハンバーガー、弁当が多く、味に対する(+)イメージが多かった。